

植物
防疫
講座

虫害編-38

ブドウに発生する主要な害虫の生態と防除

山梨県果樹試験場 うち だ かず ひで
内 田 一 秀

はじめに

ブドウは、幅広い年代に親しまれている果物の代表であり、2018年における果樹の品目別ランキングでは、生産量は第5位、生産額はミカンに次ぐ第2位である（農林水産省、2021 a）。日本全国で生産されているが、その中でも山梨県は最も栽培が盛んであり（農林水産省、2021 b）、ブドウ狩りなどの観光資源としても重要な産業となっている。

ブドウを栽培する中では、様々な害虫類が発生するが、生産者のためめ努力により高い品質が保たれており、それには、的確な診断と迅速な防除方針の決定が欠かせない。そこで本稿では、山梨県でのブドウ栽培における主要な害虫を取り上げ、その生態や被害、対策などを述べて防除の参考に供したい。

I クワコナカイガラムシ

Pseudococcus comstocki (Kuwana)

雌成虫の体長は3~4.5 mm、全身が白い粉で覆われ、体周縁部には17対のロウ質分泌物の突起があり、尾端の1対は特に長く、体長の約1/2に達する（河合、1980；図-1）。雌は3齢幼虫を経て、成虫まで発育するが、幼虫と成虫の外観は類似している。一方、雄は2齢幼虫の後、前蛹・蛹を経て、翅を持つ成虫となる（図-2）。

クワコナカイガラムシは、多くのカイガラムシ類やアブラムシ類と同様に、植物体から吸汁し、糖を多く含んだ粘り気のある甘露を排泄する。甘露にはカビが発生しやすいため、被害果房は甘露とカビで汚れ、寄生している個体による不快感と相まって、商品価値の著しい低下を引き起こす（図-3）。寄生は果房の内側、つまり外観からは認識しづらい穂軸の周辺部に多いため、被害を見逃すおそれがあり注意が必要である。なお、発生状況の把握には樹上のアリも目安となる。クワコナカイガラムシの密度が上昇してくると、排泄された甘露を目当て



図-1 クワコナカイガラムシ雌成虫



図-2 粘着板に捕獲されたクワコナカイガラムシ雄成虫



図-3 クワコナカイガラムシによる果房の被害

Ecology and Management of Key Pests on Grapes Cultivated in Yamanashi Prefecture. By Kazuhide UCHIDA
(キーワード：ブドウ，害虫，生態，防除)